（第三種郵便物認可）

外国籍の子どもの学習支援に取り組む　**中河 和子さん** 50（富山市）

支援HP作りに情熱

県内の企業などからの依頼を受けて、外国人労働者らに日本語を教える民間教育機関「トヤマ・ヤポニカ」（富山市）の代表を1993年から務める。2月には、県内在住の外国籍の子供たちのために地域で学習支援に取り組むグループが情報交換を行うホームページ「外国籍の子ども支援の情報サイト」の開設に携わった。「子供たちが、十分な学習環境を得て、明るい将来を導いていくためのきっかけにしたい」と語る。

情報サイトは、県内で外国人の学習支援を行うボランティアなどのグループが、活動を報告し合う場を設けたりなど、子ども支援の情報拠点とするのが主な目的。各種イベントを告知するコーナーを設けたり、富山大留学生センターの助教授らと協力して運営し、平仮名や片仮名、漢字のほか、助詞の使い方まで、外国人が自分で学習できるように作ったクイズ形式のソフトも無償で掲載している。

日本語教育を志したのは、都内の大学で国文学を専攻する傍ら、英語学校にも通い、日本語と英語の言語として成り立ちの違いに興味を覚えたのが出発点。

当時は日本語教師は、職業として確立されておらず、富山市内の商社に就職したが、2年ほどで退社。その後は英語塾の講師などを務めていた。夢をあきらめきれないでいた1991年に、知人の紹介でヤポニカを知り、入社。以来約15年間、日本語教育に携わってきた。「言語の壁を乗り越えて上達していく生徒の笑顔を見ると何とも言えない充実感を感じる」という。

子供たちを支援しようと思ったのは、昨年4月に射水市の南太閤山公民館で始めた外国人のための日本語教室がきっかけだ。ボランティアと外国人の相互学習の場として作ったもので、ブラジルなどの外国人の親子が訪れるようになった。

親子らとの会話を通じ、地域や学校とのつながりを持てずに孤立する親側の問題や、日常会話は出来ても、学校で必要とされる高度な学習言語を身に付ける機会のない子供たちの姿を目の当たりにした。ある日系ブラジル人の母親は、小学生の子供が4年間、学校で問題なくやっていると信じていた。しかし、自身も日本語が不得意なため成績表の見方が分からず、実際には学力がほとんどついていなかったことを後で知り、泣き崩れたと打ち明けた。「日常生活を含めた包括的な支援体制をつくる必要があると痛感した」という。

富山の外国人は、居住地域が拡散し、コミュニティも結束が弱い傾向があるうえ、日本人の住民側が外国人との付き合いに不慣れな面もある。外国人でも気軽に閲覧できるというホームページの利点に目を付け、開設にこぎ着けた。

また、昨年12月から今年2月まで、先進的な活動をしている非営利組織（NPO）や大学の研究者を講師として招き、3回にわたって各支援グループの担当者を集めた勉強会を開き、横の連携強化も進めている。

「子供たちは、社会の将来を担う大切な存在。地域社会が彼らをしっかりと受け止めてあげられる仕組みを作っていきたい」。新たな一歩を踏み出した今、大きな夢に向かって情熱を燃やしている。

文と写真　井上亜希子

（毎週月曜日掲載）

1956年、射水市生まれ。都内の大学を卒業後、会社員などを経て1991年にトヤマ・ヤポニカに入社、93年に代表に就任した。現在は教育に携わる傍ら、お茶の水女子大の博士課程で日本語教育を研究している。「外国籍の子ども支援の情報サイト」のアドレスは、（http://www.geocities.jp/kodomo_mirai2007/）

ひゅーまん